

寄稿 Rhif 5 カムリ学 雑学 の勸め (1)

カムリの国の七不思議 — カムリ学落穂拾い

*Miscellanea mewn Astudiaethau Cymreig (1)*

“Saith Rhyfeddod Cymru”

— Lloffion Astudiaethau Cymreig —

水谷 宏

はじめに

筆者は、1953年以降の学生時代から1968年ごろまでは、トマス・ハーディ Thomas Hardy (1840-1928) や ジョージ・エリオット George Eliot (1819-80) などの小説を始め、イギリス文学に深い興味を示していた傍ら、そうした文学作品との関連から、南部イングランド地方ドーセット州 Dorsetshire のウェセックス地方の方言や細江逸記博士の中部地方方言の研究に触発され、イングランド英語の方言研究と英語音声学の分野での研究にも関心をもっていた。そのころは、自分がまさか、カムライグ語の研究やカムリ学の世界に飛び込むなどとは思ってもよらなかった。それどころか、カムリ — 当時は、英語の ‘Wales’ からの借用語である「ウェールズ」という呼称を使って、そう呼んではいたものの — の国が、ただ、イングランドの西側に隣接している地方との認識しかなく、「イングランドの一部」に過ぎないという、まったく誤った考えしか持っていなかったのであった。

ところが、そのような筆者は、1968年度に、英国大使館文化部 The British Council の給費生として、バンゴール市にある北ウェールズ大学の音声学・言語学科での研修の機会が与えられたのを機に、研修の主題であった「一般音声学ならびに調音音声学の立場からの英語音声学、特に、リズムとイントネーションの研究」の傍ら、カムライグ語やカムリ学、さらにはケルト学の分野での

研究をも始めたのであった。言語に興味のある者として、折角のカムリへの研修の機会が与えられたのであるから、この機会に、少しはカムライグ語やカムリについても勉強しておこうとの考えから始めたのがきっかけとなり、次第にカムリの世界へと入っていったのであった。

当時の日本では、カムリに関する情報は極めて乏しく、皆無に等しかつたと言っても決して言い過ぎにはならない状況であった。カムライグ語やカムリ学に関する文献資料も、まったく入手できない有様であった。第一、日本語としては、そのような言葉さえ存在していなかったし、21世紀になった今でも、日本で出版されている辞書の類には、収録されていないことばなのである。今日のように、インターネット等で、国内外の諸大学の図書館の蔵書の情報が入手できる時代が来るといふことなども、想像すらできなかった。筆者のバンゴール時代の暮らしは、昼間は主目的の音声学関係の研修に没頭し、夜は、週二回、ケンブリッジ大学で修士号を取得し、筆者と同じ学科に籍を置いていたカムライグ語を第一言語とする学友が教えてくれていたカムライグ語のコースに出席して、口語カムライグ語の習得を試みたりしたが、その他の夜は、バンゴール大学の図書館に出かけてケルト学や、カムライグ語、カムリ学関係のセッションに、閉館まで居残って情報の収集に努めていたのだった。

そんな時代に始めたカムリ学の世界では、‘Yn wir?’ /アンウィール/「本当？」と疑ったこともあったし、‘Amhosibl!’ /アムホシブル/「まさか！」と否定したこともあった。さっぱり理解ができなくて、苦しんだことがたくさんあった。不思議に思ったことも多々あった。その後、何度かカムリの土地を訪れて、研修や調査活動の機会も与えられたが、振り返ってみれば、まさに「五里霧中」の状態の中に身をおいての半生を、カムリ学とともに生きてきたという実感がある。40年を経た今でも、その実感を持ち続けている。判らないことが多く、現地で収集した膨大な文献資料を漁りながら、途方に暮れることもしばしばである。正直に言って、消化が不十分なところも決して少なくはない。

幸い、定年後は、当然のことながら、時間的余裕もあり、カムリをじっくりと観察することができる日常に身を置いて暮らしている。そのような筆者にとっては、正に「カムリ再訪」Cymru eto /kəmɾɪ eto/ の世界を満喫できる暮らしである。そうした暮らしの中から、今まで進めてきた筆者なりのカムリ学 Astudiaethau Cymreig では、現地調査の他、現地各地の図書館や博物館等々で入手した文献資料からの情報は言うに及ばず、現地でお世話になった、専門家を含む多くの知人、友人から教わって得た情報等、書物や論文での公表に適さないものも多く含まれている。中には、「まったく枝葉末節だ」と思われる向きもあろうかと思われるが、せめて「雑学の勧め」として纏めておくのも一つ